20240901　振起日礼拝　コロサイの信徒への手紙４章２〜６節

「一人じゃ無理だから」

今日は、「振起日」の礼拝です。もとを辿れば、アメリカの教会学校が、その発祥であると言われています。教会学校の子ども達が、長い夏休みを終えて、再び教会へと集ってくることを感謝し、喜び合ったのが最初です。そうやって、また一緒に教会生活に取り組もうという意識を、子どもも大人も再確認したんですね。・・・という、そういう伝統から考えますと、今日の振起日は、台風10 号に邪魔されて、ちょっとケチが付いた形です。実は、敦賀教会幼稚園も、明日の休園がすでに決定していて、「さぁ、いよいよ２学期だ！」という意気軒昂な始まりとはなりませんでした。ただ、調べてみますと、振起日発祥のアメリカでも、8 月から 10 月は、ハリケーンという台風のような気象現象が多発するらしく、なので、おそらくは振起日の始まりからして、今の私たちと同じような悩みを抱えていたのかも知れません。

振起日に集いたくとも集えない方がいること、そして、2 学期初っ端から幼稚園が休園することは、悲しいことです。でも、集えないからこそ、余計に感じるのは、やっぱり、何かを「始めよう！」と意気込む時には、孤独ではなく仲間がいっぱい欲しいよね、ってことです。振起日という日も、ひとり孤独に奮起するのではなく、たくさん集まって、たくさん声を掛け合って、その上で、一緒にまた教会を盛り上げていこうねって、そう再確認する機会なのだと思います。

振起日という日は、聖書によって定められた古い仕来りではありません。だから、今日の聖書箇所が収録されているコロサイの信徒への手紙を書いた、パウロさんに、「振起日って何ですか？」と聞いても、「そんなの知らん」と言われるだけかと思います。まぁ、それは別にパウロさんに限らず、今から 2000 年前を生きた聖書の登場人物たちが、キリスト教がアメリカに根付いて以降に

定められた「振起日」について知るはずはありません。と言いますか、すごく神学的かつ歴史的な観点から言えば、とくに新約聖書に登場する多くの人たちは、まさかイエス様の昇天後、2000 年も歴史が続くなど「思ってもみなかった」ということです。つまり、世の終わり、終末、世界の完成は、すぐに来ると考えていたわけですね。それが、神様のミステリアスな御計画によって、延びに延びて、2024 年 9 月 1 日の振起日礼拝を迎えている。聖書に登場する当時の人たちにとって、今を生きる私たちは、ただそれだけで驚きに値する存在である、ということは知っていても良いかも知れません。延び延びとなった終末の日、しかし、いつか必ずやってくる、その日を迎えたなら。私たちは、パウロさんや、ヨハネさんや、マリアさんに会って、一体、何をお話しすれば良いでしょうか。

ちょっと、話が脱線してしまいました。ただ、「聖書の時代には想定されていなかった現代」を生きる私たちにとって、今日の聖書箇所は、とても重要です。今月の聖句でもありますが、「ひたすら祈りなさい」と。最近になって、「これからの世界は、予測不可能な大きな変化を来す時代になる」と、よく言われています。「だから、子ども達には、従来型の詰め込み教育ではなく、自分で問題を発見し、考察し、正解のない世界を生き抜く知性と感性が必要である」と、幼児教育界隈でも盛んに言われています。でも、キリスト教的な立場から言えば、終末が遅延し、聖書が前提としている世界観が外れた時点で、すでに「予測不可能な時代」に突入しているわけですね。今の子どもだけじゃなく、今の大人も、みんな、聖書が想定していない「予測不可能な時代」を生きている。だから、尚のこと大事なのです。「ひたすら祈りなさい」。未来の分からぬ日々を生きる私たち。希望を見失うことのある私たち。神様に委ねるしかないと思わされる私たち。「ひたすら祈りなさい」。

「祈ったからと言って、何が変わるんだ」というご指摘は、もうすでに手垢が付いた上に、撫で回されて、黒光しているかと思います。はっきり言って、祈ったら叶うという保証はどこにもあり

ません。ただし、どんな時でも、私たちには諦めてしまう前に「祈る」という選択肢が与えられています。言い換えるなら、祈る相手が、いてくださいます。どんな悲惨でも、どんな絶望でも、私たちには常に、祈る相手が、いてくださる。「世の友我らを捨て去る時も」「炎も剣もなにかはあらん」。父子聖霊なる、三位一体の神様は、いつも私たち共にいてくださる。その確信、その信仰は、間違いなく私たちが、ここに立つということに力を与えてくれます。一般的な言い方に倣うなら、自信と覚悟を持たせてくれます。「うん、私は、これで大丈夫」と。未完成な自分の知恵と力を少し手放すことで、自分を超えた三位一体の神様への信頼を育み、結果、「うん、私は、これで大丈夫」と思えること。

私たちは、一人では弱い存在です。励ましてくれる人、助けてくれる人、叱ってくれる人。そういう人がいてくれて、はじめて私たちは自らに自信を持ち、確かな足取りで歩んでゆくことができます。孤独は、良くありません。神様は、人間を一人でいて良いようにはお造りになっていません。喜ぶにしろ、悲しむにしろ、怒り、呪い、恨むにしろ。その想いを伝え合い、理解し合う友が必要です。そして、神様は、私たちに大切な友をお与えになっています。今日隣り合って座っている方々しかり。神様ご自身しかり、友なるイエス様しかり、です。

今日は、振起日礼拝です。一人じゃ熱意も信仰も振るい起こすことはできません。だから、友が必要です。地上の友と、天上の友と、神様とイエス様と聖霊さまと。「共鳴」という物理現象を意識してみましょう。通じ合う言葉や歌声で、お互いの想いが響き合うことです。一人の声は小さくても、多くの友と共鳴することで、その願いや祈りは、大きな声となって響き渡ります。そして、忘れないでいたいのは、その響き合う場所には、イエス様もいらっしゃるということです。「二人または三人がその名によって集まるところには、私もその中にいる」。マタイによる福音書 18 章 20 節にある、イエス様の御言葉ですね。

振起日の今日。教会の抱える弱さ。私たち一人ひとりが抱える弱さ。それらを、自分たちだけで、自分だけで克服しようと、気持ちを振るい起こすのではなく、「一人じゃ無理だから」と、謙虚さと神様の働かれる余白を持っていたいと思います。もちろん、私たちも私たちで、私たちなりに頑張ります。でも、手の届かないところ、委ねるしかないところは、もう開き直って、神様お願いね！と言える、心と魂の余裕を忘れないでいたいと思います。神様は、人間を一人でいて良いようにはお造りになっていません。人には友が必要で、神様が必要です。そのことを、十分に弁えて、振起日から始まる新しい毎日を歩んで参りましょう。私たちと共にあって、私たちの心と魂を振るい起こしてくださる方に感謝しつつ、また、今日集えなかった友との祈りを通した交わりを感じつつ。台風に負けない気持ちで、心新たに新しい１週間を踏み出して参りましょう。お祈りを致します。

神様。

今日、私たちは振起日の礼拝を心を合わせてお捧げしています。新しい記念日ではありますが、あなたの導かれる歴史の中で、信仰の先達が見出した大切な１日です。どうか、神様。この振起日を通して、私たちの信仰が強められ、あなたのへの信頼が新たにされ、期待と希望を見上げつつ、新しい日々へと歩み出すことができますようにお守り、お導きください。また、今日集えなかった友の上に、明日、集うことができない幼稚園の子ども達の上に、あなたの祝福と恵みと励ましが大いになりますように、お願いを致します。このお祈りを我らの救い主であるイエス・キリストのお名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。

9月誕生者の祝福祈祷　　聖書：詩編139編15～18節

秘められたところでわたしは造られ／深い地の底で織りなされた。あなたには、わたしの骨も隠されてはいない。胎児であったわたしをあなたの目は見ておられた。わたしの日々はあなたの書にすべて記されている／まだその一日も造られないうちから。あなたの御計らいは／わたしにとっていかに貴いことか。神よ、いかにそれは数多いことか。 数えようとしても、砂の粒より多く／その果てを極めたと思っても／わたしはなお、あなたの中にいる。

神様。真夏の太陽がその役割を終えて、暑さと涼しさとが交わるこの9月に、あなたは私たちの敬愛する信仰の友人らに命をお与えくださいました。私たちが生まれる前から、あなたは御心のままに、この敦賀教会へと至る道を備えて下さり、この友人たちとの出会いを御計画の内に整えてくださいました。あなたの導かれる人生は、この世界に春夏秋冬があるように、変化に富み、様々な気付きと経験を私たちに与えてくださいます。この9月に生まれた方々の人生にも、一言では語り尽くせない喜びと悲しみ、苦労と満足があったことでしょう。あなたは、その全てを用いて、今、この時までこの方々を守り、導いてくださいました。どうか、この9月から始まる新しい一巡りの上にも、あなたの力強い御手と、豊かな祝福と、信仰の支えをお与えください。あなたから与えられた命を楽しみ、その生を謳歌できる日々を、どうか備えていてください。

この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。